

Vol.155 吉祥天女(曼陀羅の仏たち - その9) 投稿者:KEN1 投稿日:2003/12/28(Sun)
09:59 No.456 (<http://www.kjk.ne.jp/~states/cgi-bin/ken1.cgi?page=30> 参照)

先々週の『日本霊異記』の続きとして、幸福の女神「吉祥天」(きちじょうてん)を詳しく紹介します。

吉祥天の成り立ち

吉祥天は、元々はインドにおいて吉祥(幸福)を司る女神として古くから信仰され、サンスクリット語(梵語)で「マハー・シュリー」または「シュリー・マハー・デーヴィー」と呼ばれていたもので、「摩訶室利」(まかしり)、「室利摩訶堤毘」(しりまかていび)などと音写されています。

この女神は、インドの神話における一大イベント「乳海攪拌」において、神々とアスラたちが乳海で大きな瓶に綱を付け、皆で引っ張り攪拌し、そこから「甘露」(アマリタ)を得た時に、その渦の中から手に蓮の葉を持って出現した白衣を纏った美貌の女神とされています。ヒンドゥー神話では、乳海攪拌の命令者であった最高神「ヴィシュヌ」の妃となり、福德を司る「ラクシュミー」と呼ばれることとなりました。また、愛欲神「カーマ」の母でもあります。

シュリーもラクシュミーも幸福や繁栄を意味し、現在でもインドでは大いに信仰されており、古くは、「功德天」(くどくてん)や「吉祥功德天」とも漢訳されていました。

吉祥天は、「帝釈天」や「那羅延天」(ならえんてん:毘紐奴、すなわちヴィシュヌ神)、「摩醯首羅」(まけいしゅら:大自在天、すなわちシヴァ神)らの諸神とともに早い時代に仏教に取り入れられました。

仏教では「徳叉迦」(とくさか)という竜王を父に、「鬼子母神」(きしもじん:歡喜母・訶梨帝母)を母に持つ、「毘沙門天」の妃(もしくは妹)ということになっています。これは、密教において吉祥天が、「胎藏界大日如来」の所変(化現(けげん)・変化(へんげ))とされ、これを「金剛界大日如来」の所変たる毘沙門天の妃としたためです。そのため、毘沙門天の居城である「有在城」(うざいじょう)の中の「妙華福光円」(みょうげふっこうえん)に「勝殿」(しょうでん)という宮殿を構えて住んでいるされます。

その他、『吉祥天十二名号経』(きちじょうてんじゅうにみょうごうきょう)では、「觀自在菩薩」の化身とされ、『吉祥天百八名経』では、「宝生如来」(ほうしょうによらい:金剛界五仏の一で、南方の如来。宝部の主尊で、五仏に五智を配して五智如来とする場合は、大日如来の平等性智の徳を司る)の分身として「金剛宝菩薩」(こんごうほうぼさつ)の化身とすることもあります。

七福神が定まる前は福祿寿の代わりに入れられることもあり、その美貌は弁財天の姿にも影響を与えました。しかし、先々週にも紹介したように、姉妹の「黒闇天」と対で入れられる必要があるためか、不吉と数が合わないため、次第に七福神には入らなくなりました。

吉祥天の信仰『金光明最勝王経』と「吉祥悔過会」

吉祥天は、奈良時代より盛んに信仰されていましたが、平安時代に入ると、朝廷に於いて「吉祥悔過」(きちじょうけか)という法要が国家的行事として行われるようになりました。これは、毎年正月に吉祥天を本尊として、『金光明最勝王経』(こんこうみょうさいしょうおうきょう：唐の義浄訳の『金光明経』の名)を読誦して、罪過を懺悔するものですが、日本では天皇の願によって行われ、主に五穀豊穰を祈願するものとして、聖武天皇の頃に始まりました。

『延暦僧録』(えんりやくそうろく)には、「諸国吉祥悔過、天下安居」の記述があります。また、『正倉院文書』には、天平宝字八年(764年)に、東大寺内の吉祥悔過所において『最勝王経』が読誦されたことが記されており、数年来の飢饉を憂いて行われたものとされています。

『続日本書紀』には、神護景雲元年(767年)、畿内七道諸国で七日間、国分寺で吉祥天悔過之法を行うことを恒例とする詔が出され、吉祥天の功德によって天下泰平、五穀豊穰を願い、飢饉を防ぎ諸国を安楽を受けるように願っています。同三年には宮中の東院玉殿で吉祥悔過を行い始めています。

『三代実録』によれば、神護景雲二年に、出雲国云として「官符を奉りて、吉祥天像一鋪を画き、国分寺に安置す」との記事が見られ、諸国の国分寺に吉祥天画像を置いて吉祥悔過会の本尊としたことが明瞭に記されています。宝亀二年(771年)には、一度吉祥悔過を停止する命が出されましたが、翌年には復活しています。

この吉祥天信仰は平安時代に入っても続き、承和六年(839年)には、正月に国分寺で行われていた吉祥悔過を、国庁で修することを恒例とすべく命じたことが『続日本書紀』に記されています。貞観十年(868年)には、8世紀に国分寺に安置した吉祥天画像を五尺の木像に改めたことが『三代実録』に、昌泰元年(898年)には、滞りがちな吉祥悔過を法の如く行われるべき布告が出されたことが『類聚三代格』(るいじゅうさんだいきやく)に、最勝講会と吉祥悔過会とを同日の昼夜に行ったことが『延喜式』にそれぞれ記されており、吉祥天信仰が盛んであったことが分かります。

このように吉祥天の信仰は、『金光明経』の流布によって広まっていきました。『金光明経』には諸訳ありますが、最初の漢訳は北涼の玄始元年(412年)より同十年(421年)、「曇無せん」(どんむせん)による『金光明経』四巻本で、日本には飛鳥時代に既に入ってきています。法隆寺の「玉虫厨子」台座に描かれている板絵の内容がそれを物語っています。

同経は次第に増補され、隋の文帝皇十七年(597年)、沙門「宝貴」(ほうき)が古訳を統合して、『合部金光明経』(ごうぶこんこうみょうきょう)七巻をつくりました。これに伴い我が国では、神亀五年(728年)を境に、『金光明経』四巻本から『合部金光明経』の採用へと切替が行われました。

唐の大足長安三年(703年)、「義浄」(ぎじょう：唐代の僧で、齊州の人。四大訳経家の一人で、671年「法顕」(ほつけん)・「玄奘」(げんじょう)の高風を慕って海路インドに渡り、695年に仏典四百余部とともに洛陽に帰還。華嚴経・金光明経、律部など56部230

余巻を漢訳しています。その旅行記『南海寄帰内法伝』『大唐西域求法高僧伝』は当時のインドを知る重要資料となっています[635～713年]。が新梵本から『金光明最勝王経』十巻を漢訳し、我が国には、天平九年(737年)から『合部金光明経』に替わって『金光明最勝王経』が採用されるに至りました。吉祥天の功德を説く四巻本の『金光明経』の功德天品は、十巻本の『金光明最勝王経』に至って、「大吉祥天女品」と「大吉祥天女増長財物品」に開品されることとなったのです。

『金光明経』の講説によって五穀豊穡を祈願することは、天武四年(675年)に見られ、天武九年には、宮中と諸寺に『金光明経』を講じ、持統八年(694年)には、『金光明経』諸国に送って正月上玄に読誦させています。そして聖武天皇神亀五年(728年)には、『金光明最勝王経』十巻本を国ごとに送って転読させるようになりました。この『金光明最勝王経』の転読をきっかけとして、吉祥天信仰の形成が進んでいき、吉祥悔過が主になったのは、「称徳天皇」の御代(764～770年)になってからと考えられています。

『金光明最勝王経』の第八「功德天品」には、吉祥天の功德が次のように説かれています。

「この天女は遠い過去世に現れて、宝華功德海琉璃金山照明如来の許で様々な善行を行い功德を積んだ。だから、もしも今の世にこの天女の名を唱えるものがあれば、五穀豊穡となり、財宝を得て衣食も豊富にあって満足するという。」

『陀羅尼集経』(だらにじつきょう)には、「我れその時に於いて、一念の如くその室宅に入り、即ちその座に坐し、是より日夜この居家、もしくは村邑、もしくは僧場、もしくは露場、乏少する所なく、もしくは銭、もしくは金銭、もしくは珍宝、もしくは牛羊、もしくは穀米、一切の所順すなわち具足を得て、悉く快樂を受くるを念ず」と記され、この天女の福德神としての現世利益を具体的に示しています。

また『涅槃経』には、先々週紹介したように、吉祥天の姉妹として「黒闇天」・「黒耳」(こくに)という災禍の神があると説かれ、いつも一緒に行動しているとされることから、密教に於いては、吉祥天法を修する時には、『般若心経』『大随求真言』(だいずいぐしんごん)などを唱えて、黒耳にも法施し供養しています。

このように日本では早くから一種の福神として信仰を集めるとともに、同時に美しい女神としての性格も伝えられたため、俗間では美人の代名詞ともなり、先週紹介した『日本霊異記』などに、吉祥天に纏わる様々な物語が生まれることとなりました。また『源氏物語』『宇津保物語』などにも、威勢の盛んな有様を毘沙門天に喩え、美貌の例として吉祥天女を引用されているなど、他の人間離れした近寄り難い仏像の中であって、美しい吉祥天の像は親しみやすく人々を魅了したのです。

鎌倉時代以降になると、近い性格を持った弁財天にその人気を次第に奪われ、その信仰は衰えて、現在では目立った信仰は見られなくなっています。

吉祥天の姿と遺作

普通は、中国・唐代の貴婦人の姿に作られています。二臂像で、中国風の優雅な衣装を身に纏い、宝冠を被り、華やかな装身具を身に付けています。一重瞼に切れ長の目をした、下ぶくれの顔は、当時の美人の典型とされ、日本に於いても高松塚古墳の壁画などにも見られるものです。

持物は一定していませんが、左手に宝珠を持つのが特徴で、右手は施無畏印や与願印を結んでいます。蓮華を持っているものもあります。例えば、浄瑠璃寺の吉祥天像は、左手は肘を曲げて掌を開いて上に向け、その上に宝珠を置き、右手は与願印をしています。

『陀羅尼集経』には、「身端正赤白色にして二臂あり、種々の瓔珞(ようらく)、環釧(かんせん)、耳当(じとう)、天衣(てんね)、宝冠を画作す。天女、左手に如意珠を持し、右手に施無畏にして宣台上に坐す。左辺に梵摩天(ぼんまてん)を画く、手に宝鏡を執れり。右辺に帝釈天を画く、散華供養の天女の如し。背後に各一の七宝山を画く、天像の上に於て五色雲を作し、雲上に六牙の白象を安じ、象鼻に瑪瑙の瓶を絞り、瓶中より種々の宝物を傾け出して、功德天の頂上に濯ぐ。天神の背後には、百宝の華林を画き、頭上には千葉の宝蓋を画作し、蓋上には諸天伎楽散華供養するを作す。その像の底下の右辺に、また呪師の形を作し、鮮白の衣を着け、手に香炉を取りて胡跪供養し白素紬上に於て坐す」と記されています。

この『陀羅尼集経』に説かれた形式が世間に広く流布し、一般的な像容とされ、左手に宝珠を執り、右手を施無畏印を結ぶ姿をしています。また、作例は少ないものの、この『陀羅尼集経』に基づいて脇侍や頭上の白象、そして背景まで描かれたものを「吉祥天曼陀羅」と称し、「吉祥天女法」の本尊として用いられます。しかし画像では、右手は与願印を結んでいます。

『大吉祥天女念誦法』(だいきちじょうてんによねんじゅほう)には、「須らく像を造るに華木を用ゆべし。その形像は左に宝珠を持し、右は与願の印を作す。身白色にして十五歳の女の如く、種々の天衣を以て微妙莊嚴す。天女形を現ずるが故に法衣を着けず、天衣を以てその身を纏う。...(中略)...右辺に功德天を画く。左手には鉢に花を盛り、右は掌を外に向く」と説かれ、薬師寺吉祥天図がこの様な形像に画かれています。また、『大吉祥天女念誦法』に於いて、吉祥天とその別称である功德天とが区別されて記されていることは注目すべきところです。

その他、現図胎蔵界曼陀羅図の吉祥天は、虚空蔵院に千手観音の右脇侍として描かれ、左手に花を盛った蓮葉を持ち、右手掌を立てて、中の三指を屈して胸に当てています。胎蔵旧図様では、花を盛った蓮葉を両手で持ち跪座し、『不空罽索経』に説かれるものに近い姿を示しています。また、『毘沙門天王経』には、右手を施願手(せがんしゅ)につくり、左手に開敷蓮花(かいふれんげ)を執り、荷葉座(かしょうざ：蓮の葉)を台座とする姿が説かれています。

吉祥天の遺品は、その源流であるインドのラクシュミー像が、既に紀元前1世紀頃の「ボ

ードガヤー」や「サンチー」の浮彫に見られます。インドでは四臂で、それぞれの手に彼女のシンボルである「蓮」「甘露の瓶」「ヴィルヴァの実」「法螺貝」を持つとされますが、通常像を作る時はインドでも日本でも二臂で表現されています。その姿は豊饒の女神に相応しく、豊満な貴婦人の姿をし、壺の上に立ち、或いは二象の灌水を浴びる姿で彫られています。

中国に於ける吉祥天女像は、『金光明最勝王經』が漢訳された唐の大足長安三年(703年)以降、盛んに行われ始めた考えられますが、『金光明經』に基づく「金光明懺法」(こんこうみょうさんぼう)が既に南北朝時代には行われていたことから、この頃の作像もその可能性が示唆されています。金光明懺法は、後の吉祥悔過法のもとになる法会ですが、その原典は現在見ることはできません。しかし、隋の『国清百録』(こくせいひやくろく)によれば、釈迦如来の左に功德天を配し、これらを本尊として行われるもので、道場が広ければ、釈迦如来の右に弁財天及び四天王を配すべきことが記されています。

遺品としては、唐代から五代にかけての作例があります。その特徴は、単独尊としてではなく、夫である毘沙門天(兜跋毘沙門天も含む)や、千手観音の脇侍として作られていることです。作例として、敦煌出土で、開運四年(947年)の年紀がある兜跋毘沙門天像(大英博物館蔵)、五代頃の千仏洞十四窟兜跋毘沙門天画、光化三年(900年)の年紀がある安西万仏峡石窟毘沙門天画(侍者は弁財天ともされます)、敦煌出土の五代頃の行道天王図(ぎょうどうてんのうず：大英博物館・ギメ美術館蔵)等に見ることができます。

また、唐の梁肅(りょうしゅく)の『壁画三像讚』(へきがさんぞうさん)には、会稽竜興寺(かいけいりゅうこうじ)の「法忍」(ほうにん)が、釈迦を中心に多聞天・吉祥天を写したとの記事があり、この頃に、毘沙門天とその妃である吉祥天との組み合わせができていたと思われる。

日本に於ける吉祥天像は、奈良時代に造像が始められ、文献や遺品の上からそれを確かめることができます。最も古い作例は、東大寺三月堂の塑像とされ、一説には天平宝字八年(764年)に吉祥悔過会の本尊として造られたと言われています。この他にも奈良時代の作品として、法隆寺塑像、西大寺乾漆像、唐招提寺銅版押出像、薬師寺麻布着色画像が掲げられます。文献には、西大寺、元興寺、興福寺などにも吉祥天像があり、『三代実録』には、神護景雲二年(768年)に、官符により出雲の国分寺に吉祥天画像を配したことが記されていることから、全国の国分寺に安置されたことが推測されています。

平安時代に入ると、「空海」「円仁」(えんにん)「円珍」(えんちん)「恵運」(えうん)らの留学僧が、吉祥天関係の經典や図像を唐から請来し、円仁は彫像をも請来しており、吉祥天信仰は益々盛んになっていきました。最勝講会や吉祥悔過会は相変わらず全国で行われ、密教に於いては宮中真言院、「後七日御修法」(ごしちにちのみしほ)等の諸法会に於いて吉祥天が重要な役割をもって尊信されています。これを裏付けるように数多くの吉祥天像が造られ、特に木像については枚挙に遑がありません。その形像には装飾的なものと簡素なものとの区別があるものの、何れも中国・唐時代の貴婦人の装束を身に纏い、宝珠を手に執っています。

鎌倉時代に入ると、その作例は減るものの、浄瑠璃寺像や興福寺像のように納められた

厨子の絵とともに、曼陀羅形式のものも作られています。

吉祥天像は、単独尊として作られる他に、「釈迦・吉祥・毘沙門」、「毘沙門・吉祥・善膩師童子(ぜんにしどうじ)」、「不動・毘沙門・吉祥」、「千手観音・婆藪仙(ばすうせん)」等の三尊形式の組み合わせが知られています。

美と富みの神に相応しい女神であった吉祥天は、人々が身近な親しみを強く感じたため、有り難い仏像というよりも、世俗の女性像に近い表現を持つものが少なくないようです。

代表的遺作

奈良・薬師寺 画像(奈良時代)麻布着色<国宝>

京都・浄瑠璃寺 立像(鎌倉時代)木造(厨子入り秘仏)<重文>

奈良・興福寺 椅像(室町時代)木造<重文>

滋賀・園城寺 立像(鎌倉時代)木造<重文>

山梨・福光園寺 立像(鎌倉時代)木造<重文>

真言

「オン マカリシエイ ソワカ」

この真言を唱えれば、大金持ちになれるとされます。また、蓮華の華が一万本咲いている池で、左手に香炉を持ち池に入って華を一本摘むごとに真言を唱え、これを一万回繰り返すと吉祥天が表れ、願いを叶えてくれるといわれます。

2003年の「Virtual STATES Symposion」も今回が最後となりました。

来年も宜しくお付き合いください。

2004年が皆様にとって良い年でありますように吉祥天女に祈安しております。

レスピーギ：交響詩「ローマの松」を聴きながら・・・

NBC交響楽団

アルトゥール・トスカニーニ指揮
